
笹ヶ峰自然環境保全地域調査(1988年度)

(環境庁自然保護局 / 受託者：財団法人 国立公園協会)

キーワード：気候調査、地形・地質・土壌調査、植物調査(植物相、植生)、動物調査
(既存資料、哺乳類、鳥類、両生・爬虫類、昆虫類)

【調査の概要】

(1) 調査目的

笹ヶ峰自然環境保全地域とその周辺を含めて各種の自然環境を調査し、この結果を自然状態の保全に役立てることを目的とした。

(2) 調査対象地域

調査は、笹ヶ峰自然環境保全地域の 537ha を中心として、その周辺を含めた地域を対象として調査を実施した。

(3) 調査の内容と方法

調査の実施にあたっては、それぞれの専門分野の学識者からなる自然環境保全地域委員会を設置し、調査の項目、方法等の詳細を定め、現地調査を行った。

自然環境保全地域における人為的影響並びに特定の植物群落、動物等各自然環境保全地域を特徴づける要素に着目しつつ調査区を設定し、地形・地質、植物、動物等の特性並びに人為影響の程度を把握するために、以下の調査内容を実施した。

1)気候調査

既存資料により自然環境保全地域及び周辺部の気候的特性を把握した。

2)地形、地質、土壌調査

自然環境保全地域及び周辺部の地形等の特性を明らかにするため、既存資料等により地形発達過程を把握するとともに、地形、表層地質、土壌の分類を行い、その分布を把握した。また、調査区の微地形、土壌層の特性並びに人為影響の程度を把握した。

3)植物調査

自然環境保全地域及び周辺部の植物の特性を明らかにするため、既存資料等により植物相及び植生分布を把握した。また、調査区の植物群落の組成、構造、遷移、動態の特性並びにこれらに対する人為影響の程度を把握した。なお、調査は 8～10 月にかけて実施した。

4)動物調査

自然環境保全地域及び周辺部の動物の特性を明らかにするため、既存資料等により動物相(哺乳類相、鳥類相、両生・爬虫類相、昆虫相)及びその分布状況を把握した。また、調査区における哺乳類、鳥類、昆虫類の生息状況及びその生息環境の特性並びにこれらに対する人為影響の程度を把握した。

(哺乳類)

- ・調査は探索調査、聞き取り調査、わなによる調査、夜間写真撮影について、8～10月に実施した。

(鳥類)

- ・調査は登山道をたどるラインセンサス調査によって、6月から翌年3月にかけて5回実施した。

(昆虫類)

- ・調査は任意採集、ベイトトラップ、灯火採集等の方法によって、7月及び10月に実施した。

(4) 調査の結果

1)気候調査

- ・年降水量は2,600mm以上、12月中旬～3月中旬にかけては積雪がみられ、脊梁部の年平均気温は7℃以下と推定された。

2)地形、地質、土壌調査

- ・地質については、中生代の三波川結晶片岩からなり、下位は黒色片岩、上位は緑色片岩で、東西に連なっていた。分布としては、自然環境保全地域の北縁をなす稜線部に緑色片岩が、また高度の低い稜線上の鞍部や南側山腹斜面には黒色片岩となっていた。
- ・地形については、四国山地の脊梁にあたり、しかも1,500mを超える部分が主体となるため、山頂部に古い地形面が残っている一方、周辺部からの浸食も激しかった。
- ・笹ヶ峰頂上に、山体自身の重さと周辺部の急激な浸食による応力解放の結果、三角点付近が相対的に沈下して形成したと考えられる多重山稜・線状凹地・小崖地形が見出された。
- ・傾斜した山腹とやせ尾根の寒風山、特異的地形のある笹ヶ峰、著しい非対称山稜と山頂付近に凹地を有する乳山、周辺を急崖で囲まれた尖頂峰の冠山、平坦な頂上と南北に広いマスムーブメント地形を有する平家平など、それぞれ個性豊かな山容が連なっていた。
- ・雪崩とクリープによる明確な地形は認められないが、地すべり・崩壊・土石流・落石等、西南日本外帯にみる山地浸食の諸現象がすべて存在していた。

3)植物調査

- ・調査の結果、83科195属323種が確認された(シダ植物33種、裸子植物7種、単子葉植物55種、双子葉植物228種、変種及び品種を除く)。
- ・確認された種のなかには、残存植物のほか、四国山地の固有種、四国が分布の南限となるもの、襲速紀要素の植物が含まれていた。
- ・自然環境保全地域に分布する主な植生は、シラベ林、ブナ林、ウラジロモミ林、オオイタヤメイゲツ林、アカカンバ林等で、渓谷沿いにはサワグルミ、カツラ、オヒョウ等が混じる林がみられた。
- ・このほか、自然環境保全地域の約40%をササ草が占めていた。

4)動物調査

(哺乳類)

- ・調査の結果、6目16種が確認された。自然環境保全地域では、ニホンザル、イタチ、テン、キツネ、イノシシ、アナグマ、ノウサギ、ヤマネ、スミスネズミ、アカネズミ、ヒメネズミ、周辺地域ではタヌキ、ニホンリス、ハクビシン、ムササビ、ニホンモンガが確認された。
- ・かつてこの地域にいたツキノワグマ、ニホンジカ、ニホンカワウソ、カモシカ等は、現在ではみられなかった。

(両生・爬虫類)

- ・今回の調査では、両生・爬虫類の調査としては最良の時期ではなかったため、リストのみを示した。
- ・爬虫類は6種(ニホントカゲ、ニホンカナヘビ、シマヘビ、アオダイショウ、ヤマカガシ、ニホンマムシ)、両生類7種(オオダイガハラサンショウウオ、ハコネサンショウウオ、ブチサンショウウオ、ニホンイモリ、ニホンヒキガエル、ニホンアマガエル、ツチガエル)が確認された。

(鳥類)

- ・調査の結果、27種が確認された。夏鳥はツバメ、メボソムシクイ、コマドリ等10種、留鳥はウグイス、ヒガラ、コガラ、ヤマガラ等15種、冬鳥はマヒワ、ビンズイの2種であった。
- ・観察数の多いものはウグイス、ツバメ、次いでヒガラ、メボソムシクイ、コガラ、ヤマガラ、コマドリ、マヒワ等であった。

(昆虫類)

- ・調査の結果、全部で492種が確認された。既往の文献とあわせると、13目100科512種の生息が明らかになった。
- ・確認種のなかには、四国ではじめて捕獲されたネアカナカジロナミシヤクが含まれている。このほか、オオムラサキ、ムカシトンボ、ホシナカグロモクメシヤチホコ、

ミヤマアカヤガのほか、石鎚山地や四国地方の特産種も多く採集された。

(5) 調査の報告書及び成果物の名称

- ・「笹ヶ峰自然環境保全地域調査 Conservation Reports of the Sasagamine Nature Conservation Area, Kochi, Japan」(1989年3月 環境庁自然保護局)